



# ハレムマスカレード

Harem Masquerade

立ち読み版

小説 竹内けん  
挿絵 空維深夜



ドモス

クロチルダ

金剛壁

セレスト

バザン

インフェルミナ

リア

●カリバーン

●アーリア

●ベニーシェ

ネフティス

●マドラ

●バーミア

●ベアトリス

ヴィーヴル

●バタフライ

ヴァスラ

●レナス

雲山朝

●ヤザ

エニ

オレアンダー

ラルフイント

●マリオハール

●ゴールドマリー

●カンタクタ

ティヴァン

●デミアン

山麓朝

●ラーズングラード

リュミネー川

●ゴットリーブ

サブリーナ

●プロヴァンス

オニール

エトルリア

●ロードナイト

シルバーナ

翡翠海

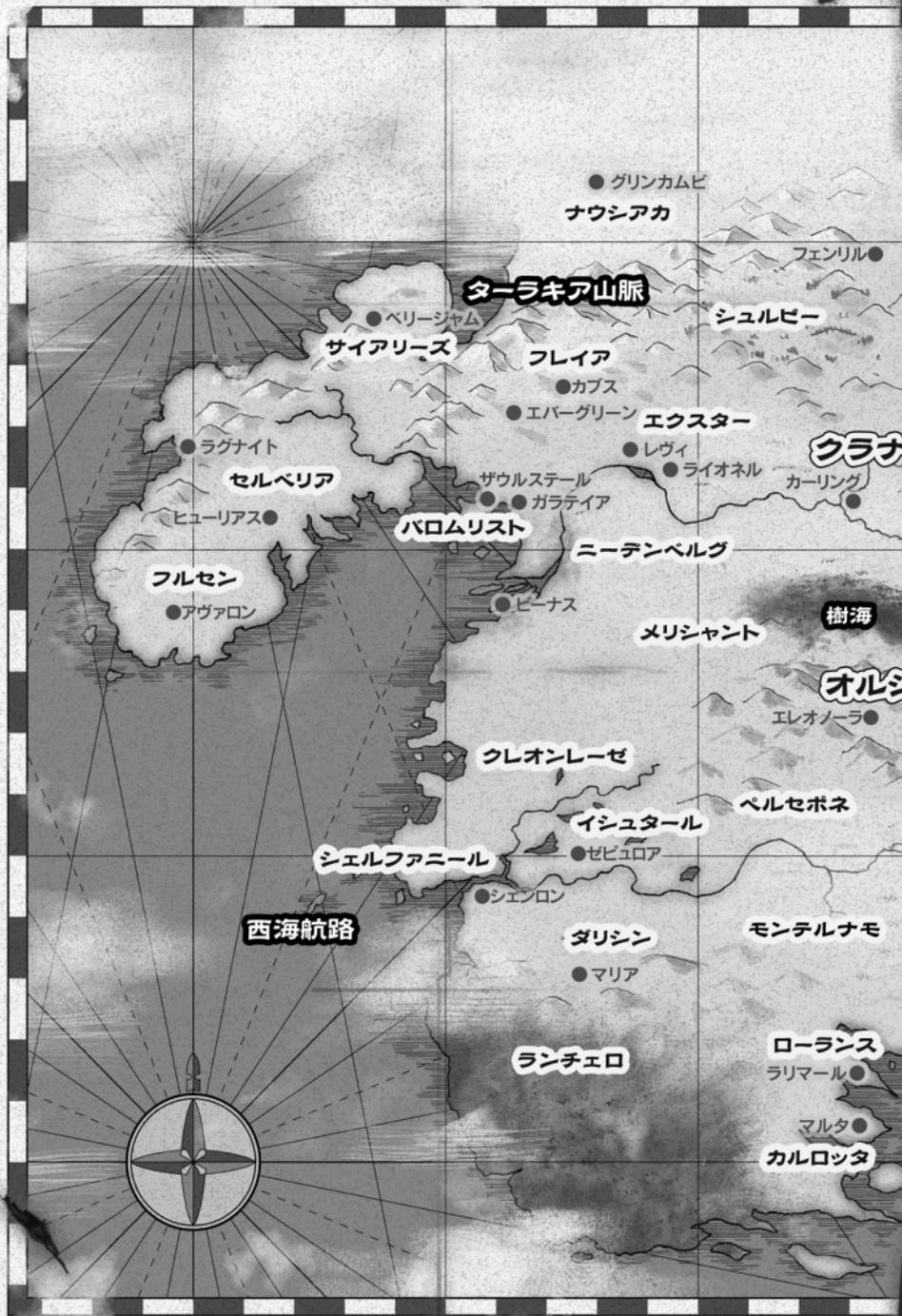
●バルザック

●ブラキア

トルフィヤ

サマルランサ

ミュラー



● グリンカムビ  
ナウシアカ

**ターラキア山脈**

● ベリーシャム  
**サイアリーズ**

**フレイア**

● カブス

● エバーグリーン

**エクスター**

● ラグナイト

**セルベリア**

● ザウルステール

● ガラティア

● レヴィ

● ライオネル

**クラナ**

● カーリング

● ヒューリアス

**バロムリスト**

**ニーデンベルグ**

**フルセン**

● アヴァロン

● ビーナス

**メリシャント**

**樹海**

**オルシ**

● エレオノーラ

**クレオンレーゼ**

**ベルセボネ**

**イシュタール**

● セビュロア

**シエルファニール**

● シェンロン

**西海航路**

**ダリシン**

● マリア

**モンテルナモ**

**ランチェロ**

**ローランス**

● ラリマール

● マルタ

**カルロッタ**



## 登場人物紹介

Characters



### エリック

絶世の美少年。旧ガルシャル王国系の家臣で先日、兄が戦死した。

### イゾルデ

通称仮面の女。サマルランサ王国で暗躍する謎の多い美女。



### ルグランジュ

ガルシャル王国からミュラー  
国に亡命した名将、未亡人。



### ギネヴァ

高慢で気高い姫騎士。初代国王  
グューヴウの長女でありシヨタコン。

第一章	家督相続の条件	009
第二章	色小姓のお仕事	046
第三章	好奇心は猫を犯す	082
第四章	幽霊との邂逅	118
第五章	青き薔薇の秘密	156
第六章	水と油を混ぜる方法	200

そう露悪的に笑ったイゾルデは、ただでさえ開いていたドレスの胸元を左右にさらに開く。

布地の端から、プルンと尖った乳首があらわとなった。

銚色に日焼けした肌に対して、乳首の色は薄いので、妙に白っぽく見える。

（うお、やっぱあの布地って乳首ギリギリのところだったんだ）

肌にぴったりとした衣装の上からでもわかっていたことだが、よく実った乳房である。

色白なギネヴァとは違う。日焼けした肌というのは、異様にエロく感じるから不思議だ。

「ごくり」

思わず生唾を飲んだエリックの食い入るような視線を、乳房に感じたイゾルデは、見せつけるように軽く自らの手で持ち上げてみせる。

「この身体で童貞を捨てるのは嫌なのか？」

「いえ、そんなことは決して……」

本心を言えば、土下座してお願いしても童貞を食べてもらいたいお姉様である。

そして、いろいろとエッチなことを教えてもらいたい。

（色っぽい。なんで褐色に日焼けした肌って、こんなに色っぽいんだ。肌に蜂蜜でも塗られているみたいに美味しそうだ。あのおっぱいをしゃぶってみたい）

これがエリックの偽らざる気持ちである。しかし、それをしたら身の破滅である。自分

だけならば、こんな美しくもセクシーなお姉様に童貞を捧げて、気持ちよく一発して死ぬのは本望である。しかし、いまのエリックは個人ではなかった。その背中には、多くの家臣領民の生活がかつている。

それゆえに公人としての理性が残った。

「あ、まって。許して、それだけは……。ご希望なら、おっぱいをいっぱい揉みますし、オマ○コを隅々までいつまでも舐めます。アナルだって舐めさせていただきます。おしっこだって飲みます。でも、セックスだけは許してください。ギネヴァ様に絶対に禁止されているんです。童貞を捧げること以外のことでしたらなんでもします」

エリックの必死の嘆願に、イゾルデは考えるように頷いた。

「そうか。ならばギネヴァのやつに徹底的に仕込まれた舐め犬としての技術、あたしも楽しませてもらおうかな？」

「はい。それで許していただけるならば飲んで♪」

ギネヴァから他の女とのエッチを禁じられている。しかし、セックス以外なら、ギリギリ言い訳が立つ。……ような気がする。

それに綺麗なお姉さんの身体には触れてみたいし、生殖器も舐めてみたい、というのが否定できない本心であった。

「では、まず接吻からだ」

仮面の女は、上から覆いかぶさるようにして上体を下ろしてくると、エリックの顔の左右の床に手を置いて、唇を重ねてきた。

「うぐ」

当然、イゾルデの唾液が、エリックの口腔に流れ込んでくる。青臭い渋みが口の中に溢れる。

（これってぼくのザーメンの味？）

自分の精液を飲まされているのだ。不快なはずなのに、一旦、綺麗なお姉さんの口に収まってから、改めて口移しされると、それほど嫌悪感を覚えなかった。

舌を搦め捕られ、貪るような接吻をしながら、エリックは両手で、乳房を掴んだ。

（あ、柔らかい。大きいだけではなくて、弾力もあつて揉みごたえあるなあ。ギネヴァ様のおっぱいとは別物だ）

ギネヴァの乳房よりも、一回り大きな乳房だ。

うつ伏せだからこそ、より大きく感じるのかもしれない。

全体を揉みしだきながらも、同時に乳首もまた指に挟んで扱き上げる。

女性の乳房は乳首で感じる、というギネヴァ仕込みの奉仕だ。

「う、ふむ、ふむ……」

うつ伏せになり濃厚な接吻をしていたイゾルデが、気持ちよさそうに鼻を鳴らす。

(やっぱり、怖い仮面を付けていても、中身は普通の女性なんだ。乳首を弄られたら感じてしまうんだ。もう、乳首をこんなにコリコリに硬くさせちゃって、エロいな♪ エロエロなお姉さんって素敵だよ)

イズルデが感じていることに勇気を得たエリックは、接吻をやめて、懇願する。

「イズルデさんのおっぱい、しゃぶらせてください」

「ふん、積極的になってきたじゃないか。ああ、いいぞ。せいぜい奉仕しろ」

鼻で笑ったイズルデは上体を起こした。そこでエリックもまた上体を起こし、その乳房に顔を埋めた。

蜂蜜のような肌の中にあって、一際目立つ白い乳首に口づけをする。

「あっ」

少年に乳首を吸われたお姉様は、その頭を両手で抱いて、のけぞった。

(よし、感じている。感じている)

仮面のせいで表情がわからないのが、残念ではあるが、半開きとなった肉感的な唇から熱い吐息とともに、涎が垂れていることから、そうとうな快感に襲われていることがわかる。

エリックは左右の乳首を交互に吸った。吸っていない乳首のほうは、指で激しく捏ねまわす。

「あ、なに、この子？　かわいい顔して凄く上手。ギネヴァのやつ、仕込みすぎよ。ああああ!!!」

エリックの頭を両腕で抱いたイゾルデは、大きくのけぞった。

ヒクヒクヒクヒク!

乳首だけで、イゾルデが絶頂したことは明らかだ。

それと確認したエリックは、乳首から口を離す。

「はあ……、はあ……、はあ……。まったく、かわいい顔して、やることがえげつないわね」

肩で息をするイゾルデは、口元を手の甲で拭って負け惜しみを言う。

「満足していただけましたか？」

「ああ。次はあたしのオマ○コを舐めてもらおうか」

「はい。飲んで舐めさせていただきます」

仮面で隠しているが、綺麗でセクシーなお姉様の陰唇である。舐めたくないはずがない。エリックは嬉々として応じた。

「ふんっ、言うまでもないことだが、歯を立てたら殺す」

「承知しております」

エリックを再び仰向けに押し倒したイゾルデは、少年の顔の左右に足を置くと、黒い見

セシヨーツを脱ぎ、さながらトイレで用を足すような姿勢で腰を下ろしてきた。

過激なハイレグシヨーツを愛用している関係だろう。陰毛は恥丘にさらつと一房の金髪を残しているだけで、あとは綺麗に処理してしまっているようだ。尻毛の果てまでない。

あのような痴女装束を纏う上での身嗜みなのだろう。

（あれ？ アンダーヘアは金髪だ。頭髪は銀だから、頭のほうを染めているってことか。まさか、下の毛だけ染めるってことはないだろうしなあ。なんか不思議。まあ、似合っているけど……うふふ、それにしても頭髪は豊かなんだし、本当はすごい剛毛なんじゃないかなあ）

などという勝手な妄想をしながらも、生唾を飲んだエリックは、嬉々として両手を伸ばし、左右の人差し指で、肉割れをくぱつと開く。

ぬらつと狭間に、透明な液体が蜘蛛の巣のように広がった。

（うわ、濡れている♪ 濡れている♪ これが仮面女のオマ○コか。やつぱ普通だよな）  
エリックが見た女性器としては、ギネヴァに続いて二つ目である。

クリトリスがあり、尿道があり、膣孔がある。顔と同じで、あるべきパーツは変わらな  
い。ただし、同じ機能のものが置かれていても、人の顔がそれぞれ違うように、ギネヴァ  
とイゾルデの生殖器は違っていた。

身体全体の肌が褐色に日焼けしているせいか、イゾルデの陰唇の中の粘膜は赤っぽい。

匂いもバター臭も強烈だ。

淫核は明らかに、イゾルデのほうが大きい。包皮から赤黒い中身が飛び出している。

膣孔も大ぶりの気がした。

ギネヴァの生殖器よりも、イゾルデの生殖器のほうがよりエロく見えるのは、エリックの先入観のなせる技かもしれないが、見ているだけで吸いこまれそうになる。

「そんなにじろじろ見ているだけではなく、そろそろお舐め」

さすがに局部を注視されることには羞恥心を感じるのか、視線から逃れるようにイゾルデは腰を下ろしてきた。

「ふぐっ」

セクシーお姉様の媚粘膜によつて、少年の視界と鼻腔は塞がる。

いわゆる顔面騎乗だ。

シャリシャリヌチャヌチャ……。

少年の顔面に座り込んだお姉様は、腰を乱暴に前後に振るつてきた。

（あ、オマ○コの味もやっぱり違う。この仮面女のオマ○コのほうが濃厚だ。あれ？ これってもしかして溜まっているってことかな？ そうだよな……。いくらエロい格好していても、こんな妖しげな仮面をしてたら、恋愛なんてできないよな）

勝手な妄想をしつつ、エリックは嬉々として舌を動かした。





イゾルデもそれと気づいたようで、ビクリと赤ワインを持つ手が震える。

それからルグランジュはうつ伏せになると、むっちりとした白い尻を差し出してきた。

「まだまだできるんでしょ。さあ、いらっしやい」

「は、はい」

戸惑いながらも、後ろに立つと、ルグランジュは嗤いながら促した。

「若い女は顔を見てやりたがるけどね。実は後ろから責めたほうが効果的なのよ」

「なるほど、勉強になります」

言われた通り、エリックは後ろから逸物を押し込んだ。

「うむ……」

うつ伏せのルグランジュは、気持ちよさそうに鼻を鳴らす。

ヌルヌルの肉褻が、逸物に絡みついていた。

（うお、なにこれ、イゾルデさんのオマ○コとぜんぜん違う。イゾルデさんのオマ○コはきゅつと締めてくるのに、ルグランジュさんのオマ○コは全体をヤワヤワつと締めてくる）

単に年代の差なのか、女性の個性の差なのかはわからない。しかし、少年を夢中にさせる、という意味では甲乙つけがたいものがある。

それに牝という生物は、初めて関係を持った牝に対して、一番興奮するものである。

「遠慮しなくていいわよ。思いつき突きまわしなさい」

「はい。では、いきます」

エリックは白い尻を左右から持ち、恐る恐る腰を動かした。

(うお、吸いついてくる。気持ちいいよお)

エリックは思わず、イゾルデの視線を忘れて、目の前の牝に集中してしまった。

「あん、あん、いいわ。坊や、もっと激しくしていいのよ。そお、そう、後ろから抱きしめて、おっぱい揉んでちょうだい」

「あ、はい」

腰を振るうことに熱中していたエリックは、慌ててルグランジュの背中に抱きつくと、腋の下から手を入れて、乳房を揉みまくった。

ヌルツとした。

先ほどパイズリで射精した精液が胸元に付いていたのだろう。

それを嬉々として乳房に塗りたいくりながら、エリックは腰を使った。

「あん、あん、いいわ。気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい……」

ルグランジュの牝声に気をよくしたエリックは、蟹股になりながら、夢中になって腰を叩きつける。

パンッ！ パンッ！ パンッ！ パンッ！

女の尻と少年の腰が激しくぶつかり合って、拍手音が暗闇の中で響き渡る。

(すげえ) 反応いいなあ。三十代の女は一番美味しいって聞くけど、まさに納得って感じだ。

いまだ二十代前半であろうギネヴァやイゾルデは、肌がプリップリで弾力があり、油断すると弾き飛ばされるような迫力がある。

それはそれでかぶりつき甲斐がある、美味しい身体だ。

しかし、ルグランジュの身体は、彼女たちとは違って、しっとり吸いついて離さないのだ。

いつまでも抱きしめていて、いつまでも逸物を突っ込んでおきたくなる。

「あ、もう……」

「いいわよ。中に出して」

「はい！ うあおおおおお」

両の乳房を鷲掴みにしたエリックは、思いつきり腰を引いたら、入れられるだけ押し込んだ逸物を爆発させた。

ドクン！ ドクン！ ドクン！

「ああ、凄い、いっぱい、ああああキター~~~~」

少年の脈打ちが、そのまま熟れた牝の身体に乗り移っていく。

思う存分射精したエリックは、ルグランジュの背中に抱きつき、その耳元で囁く。



反サマルランサ王国の闘士として知られた女傑が、一回り以上も年下の少年に犯されて、身も世もなく絶頂させられて、崩れ落ちてしまう。

「このおちんちんならやれます。あの二人も墮ちるでしょう」

眼前にきた事を終えたばかりの逸物をルグランジュは口を含み、丁寧の後処理をしながら励ましてくれた。

「ありがとう。それじゃ、頑張ってみるよ」

かくしてエリックは、決戦の地である寝室に向かった。

※

「うわ、いい眺め♪」

寝室に入ると、まず目に飛び込んできたのは、餛飩をしたお尻と白磁のようなお尻である。

寝台の上に二つ並んで置かれていた。

ルグランジュの仕業であろう。

エリックから見て、右にギネヴァ、左にイリーシャが、それぞれ素っ裸に剥かれた上で、並んでうつ伏せにされている。

二人とも両手首を縛られていて動けないらしい。

宿敵である二人は、ずっといがみ合っていたようだが、殴りつけることも叶わず、互い

に膝を立ててお尻の側面でおしくらまんじゅうをしていたようだ。

エリックの存在に気づいた二人は、それぞれ股の間から怒鳴ってくる。

「エリック、このバカ女をなんとかしろ」

「エリック、この痴女を殺せ」

相変わらず殺伐とした二人である。

肩を疎めながら軽く溜息をついたエリックは、服を脱ぎながら寝台に乗る。

「寝室では、もう少し甘い語らいを期待したのですが……」

エリックのぼやきにイリーシャが怒鳴る。

「語らいもなにもあるか!! エッチであたしをどうこうできると考えている。その心根がまず気に入らぬ」

「そうだ。わたしが、エッチで墮とせると考えている時点で、ふざけているとしか言えぬ」  
ギネヴァも噛みつかんばかりに怒鳴ってくる。

怒れる女虎たちに威嚇されるのは恐ろしいが、一人とも鎖に繋がれている状態である。エリックはとりあえず、右手でギネヴァのお尻、左手でイリーシャの尻を手取る。

「墮ちると思うんだけどなあ? それじゃ、こうしましょう。お二人が入れて、というまでおちんちん入れませんか。せいぜい我慢してください」

溜息混じりのエリックの提案に、イリーシャは激怒する。

「ふざけおつて、まるであたしがおねだりすることが前提みたいなことを」

「そうだ。わたしはおまえのおちんちんなんて欲しくないぞ」

「そうかなあ？ まあ、いいですけど」

エリックは悠然と笑うと、女たちの尻に取りついた。

「それにしても、壮観な眺めだな。まさか、イリーシャ様と、ギネヴァ様のお尻をこうやって並べて、オマ○コ見比べられる日がくるなんて、予想してなかったもんな。まさに夢の光景だ」

「くっ」

裸体の二人は奥歯を噛む。

いかに心猛き女たちといえども、生殖器を覗かれ、他の女と見比べられるなど恥辱の極みだ。

まして、相手が終生のライバルというべき女とあつては、心穏やかにはいられないだろう。

張りのある見事なお尻たちだが、大きさそのものは、色黒のイリーシャのほうが若干大きい。パンツと張った立派な臀部である。

色白のギネヴァのお尻も悪くはないが、エロさという意味では、イリーシャのほうが上かもしれない。

色が黒いせいかわ、黒砂糖でできているかのような甘い錯覚に陥る。

「ほんと、美味しそうなお尻だ」

魅せられたようにお尻を撫でまわしていたエリックは、不意にイリーシャの右の尻肉の先を噛んだ。

「ひい！」

驚いたイリーシャは、思わず悲鳴を上げる。

カミカミ。

別に肉を噛み切ろうとは思わないが、菌型をしつかり付けて口を離す。

次いでギネヴァのお尻にも同じように菌型を付けてから、改めて尻の谷間を覗く。

ギネヴァは赤紫色。イリーシャは白っぽい。それぞれの肛門が鎮座していた。

(昨日は、ギネヴァ様のここにおちんちん入れたんだよな)

感慨深くエリックは、二人の肛門の皺をなぞる。

「あ……」

ビクンと震えて、甘い声を上げたのはギネヴァだ。

どうも肛門というのは、女性によって感度の違いが激しい場所らしい。

ギネヴァは明らかに肛門に性感帯がある。イリーシャは感じているというよりも、煩わしそうだ。

優しく肛門をマッサージしたあと、会陰部を通って、亀裂へと指を下ろす。

二つともいささか半開きになっており、ヌルヌルと蜜が滴っていた。

ギネヴァの肌はどこまでもツルツルだ。毎晩、エリックによって丁寧に剃毛されているのだから、一晩ぐらいいさぼったからといって、目立つほどに生えはしない。

イリーシャは黄金の陰毛だ。頭髮こそ銀髪に染めているが、さすがに陰毛までは染めていないので、自毛が出ている。

エリックは左右の人差し指と中指を、私たちの亀裂の左右に添えると、V字に広げた。私たちの秘密の門が、ぬちゃつと透明な粘液の糸を引きながら開く。

「あれ、お二人ともなんだかんだ言っ、結構濡れていますね♪」

「ぐっ」

二人とも言い訳はせずに、口をつぐんだ。

見なくとも、自分がどれほど濡れているかの自覚はあるのだろう。

女には被虐の快感というのがある。まして、いままでは自分が絶対有利の立場で関係が続いていた少年に、今度は一方的に弄ばれるのだ。精神的にかなり昂たかぶっているのだろう。

(やっぱ、こうしてみると、オマ○コも個性あるよなあ)

目鼻立ちと同じでパーツそのものは同じだ。しかし、全体的にぜんぜん違う印象を受ける。

ギネヴァは『青い薔薇』に相應しいと言うべきか、全体に青紫の粘膜をしている。膣孔も淫核も小さい。

イリーシャは『仮面の女』に相應しいと言うべきか、外面はエロいのに、中身は妙に清純な印象がある。

(どっちも美味しそう、という意味では同じなんだけどね)

内心で嘯いたエリックは、舌舐めずりをして、左右のエロ尻を抱き寄せると、交互に顔を突っ込んだ。

ぴちゃぴちゃぴちゃ……。

「あ、こら……音をたてて……」

「ああん、くっ、味を比べるなんて……」

イリーシャとギネヴァは、互いに相手を意識しているようだ。

横目で窺い合つて、相手より乱れてなるものか、という意地の張り合いをしているようだったが、二人ともエリックに、自らの生殖器を散々に舐めさせてきた女という意味では同じだ。

その秘密はすべてエリックに把握されている。

しかも、いつもはエリックに舐めさせていたのに、今日は舐められているのだ。そのちよつとした違いが、女たちを日頃とは違う陶酔の世界へと導く。

「ああ、イリーシャ様の蜜も、ギネヴァ様の蜜も美味しいです♪」

イリーシャのほうが若干、味は濃いのが、格段の違いはない。どちらもちよつとしょっぱい程度のもので、別に甘い、というわけではないのだが、エリックの脳は甘いと判断した。極上のお姉様たちの肉華から滴る蜜である。美味しくないはずがない。それを味比べする、という贅沢さにエリックは夢中になった。

「あん、あん、ああ……はん……」

「く、ひん、ああ……そこダメ、そこは……」

この二輪の花は、エリックにとって愛で慣れた華たちだ。

どこをどう舐めれば、お姉様たちが飲ぶかは完全把握済みだ。目を瞑っていたって、絶頂させる自信がある。

二つ同時というのはさすがに難しいが、それが焦らし効果をもたらしているのだろう。

二人とも競うようにエロ尻を高く掲げて、クネクネとくねらせているさまが可愛い。

(そろそろイかせちゃおうかな。どうせだから、二人同時にイクように調整したいな)

そんな憎らしいことを考えるほどの余裕があるエリックは、左右の手で、お姉様たちの陰核を抓んだ。

どちらも完全に剥け出たクリトリスだ。そこを口に含み唾液をたっぷり乗せた舌先で、高速回転させてやれば、どちらも身も世もなく啜り泣きながら、絶頂することはわかって

いた。

お姉様たちのほうも、早くそれをやってくれ、とおねだりするように腰を突き出してくるが、あえてやらない。

淫核の根元に残っている包皮を押し戻して、それ越しに抜く。さながら男のオナニーのように、淫核を扱った。

「ああ、あああ……」

「く、ううん……」

二つの膣孔が、パクパクと物欲しそうに開閉する。

(うわ、二人ともおちんちん欲しそうだな。ぼくも入れたい)

今すぐにでも逸物をぶち込みたい、という欲求に耐えながら、とりあえずは我儘お姉様たちを、淫核でイカせることに集中する。

「あ、そ、それダメ……ああ」

「お、おまえ、卑怯だぞ、それは……あああ!!!」

急所責めをされたお姉様たちは、上体を潰し、エロ尻だけを高く掲げて、ビクンビクンと痙攣した。

お尻の孔までピクピクと痙攣させたかと思うと、二つの膣孔が物欲しそうに大きく開いた。次の瞬間、プシヤッと熱く濃密な液体を吐き出す。

右頬にギネヴァの、左頬にイリーシャの温かい愛蜜がたつぷりかかる。それを右手の甲で拭ったエリックは、ペロリと舐めてから身を起こす。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「くう……うん、ふん……」

侮っていた少年からの強制的な絶頂にさらされたお姉様たちは、うつ伏せになり、尻を高く掲げたまま、荒い呼吸を整えている。

鉛色の内腿も、雪色の内腿も、いずれも失禁してしまったかのように、トロトロと濡れ輝いている。

「うふふ、二人とも、そろそろおちんちんが欲しいんじゃないありませんか？ ぼくの奥さんになるって、約束してくれたほうからおちんちんを入れてあげますよ」

「なっ！」

牝獣二匹は、ぴくりとして身を固くする。

「イリーシャ様は、ガッツンガッツンと激しくされるのがいいんですよね。ギネヴァ様は、素早い高速突き。お二人の性癖はもうぼくにばればれなんですから♪ これからいくらでも気持ちよくしてあげますよ」

エリックはいきり立つ逸物の存在を誇示するように、白い尻と黒い尻の谷間にそれぞれ交互に置いた。

エロ尻二つは、まるで逸物を求めるように淫らにくねる。

本人たちの意識とは裏腹に、その肉体はすでにエリックの逸物に馴染んでしまっており、早く入れる、と訴えているかのようだ。

しかし、二人とも意地っ張りという意味では人後に落ちない性格である。

「こ、これしきで、わたしが堕ちると思ったか……」

「そうだ。この程度のことと、あたしを意のままにできるなどと考えること自体が甘い」  
ギネヴァとイリーシャは、それぞれ強気に反論してくる。

失望したエリックは溜息をつく。

「はあくほんと意地っ張りですよ、二人とも。それじゃ、こんなのでどうかな？」

そう嘯いたエリックは、右手をギネヴァの股間に、左手をイリーシャの股間に入れた。そして、それぞれの濡れた腭孔に人差し指、中指、薬指の三指をずっぽりと入れてしまった。

「あぐっ」

二人は同時に震えたが、それだけでは終わらない。エリックはさらに親指を肛門にかけると、そのまま押し入れた。

さらに中指の腹と親指の腹で、狭間の肉壁を採みほぐす。

「ひっ、ひぎ……」

「うほ、おほほ……」

どんなに気の強いお姉様たちでも、この責めには耐えられないらしい。

二人揃って、背筋を弓なりに反り返らせると、天を仰ぎ、白目を剥き、大口を開け、舌を出し、意味不明な喘ぎ声を出す。無様なアへ顔を晒してしまう。

（うわあ、ルグランジュさんに教えてもらって、初めてやってみたんだけど、これって効いているな♪）

さらにエリツクは器用にも、小指を伸ばすと、二人の陰核を刺激してやった。

「あああ……も、もう……ダメエエエツ!!!」

「らめええええええ!!!」

膣孔と肛門に指を入れられて揉みほぐされた女傑は、揃って断末魔の悲鳴を上げた。

ブシュー!!!

エロ尻を高く掲げたお姉様たちは、ほぼ同時に滝のように失禁してしまった。

「あらあら、お二人とも仲良くおしっこ漏らしながらイきましたね。さすがは親友。口では罵り合いながらも、気は合いますよね」

エリツクにからかわれて、二人ともさすがに頬を染めて恥じている。

そんな二人のお尻から手を離れたエリツクは、二人の背中から抱きつくようにして、右手でギネヴァの右の乳房、左手でイリーシャの左の乳房を握りながら、いきり立つ逸物を

下半身に押しつける。

「ねえ、イリーシャ様、ギネヴァ様。ぼくのおちんちん、もうこんなになっちゃって、入れたくて仕方ないんですけど、入れてはいけませんか？」

エリックの甘えた声にイリーシャは、憤然として応じる。

「あたしはおまえなどの言いなりにはならん」

「いいわ。入れてちょうだい。わたし、あなたの言う通りにするわ」

「つて、おまえなに堕ちているんだ。そういうところが、昔から嫌いなんだ」

ギネヴァの応えに、イリーシャは血相を変えて怒る。

「だって、わたし、あなたと違ってエリックのこと本気で好きだし……その望みを叶えてやりたい」

「ギネヴァ様、嬉しいです」

エリックは二人の乳房を握り揉みしだきながら、狙いたがわずギネヴァの膣孔の中に押し込んだ。

「あん、エリックいいわ。わたし、いつのまにかあなたのおちんちんの奴隷にされていたのね♪ うふふ、頼もしくなってますよ、あはん♪」

「ギネヴァ様のおマ○コも最高です」

エリックは左手でイリーシャの乳房を、右手でギネヴァの乳房を揉みつつ、膣孔をガツ

ガツと犯す。

グチヨグチヨと卑猥な水音があたりに響き渡った。

「あん、気持ちいい、最高。エリック好きよ、大好き♪ わたしこのおちんちんの奴隷よ。エリックが望むことならなんでもしてあげちゃう♪」

ギネヴァはいつも以上に乱れているようだ。それは明らかに隣に居るイリーシャを意識していることだろう。

「ぐっ、情けない。ちんちんに負けて、己の信念を曲げるなど、おまえはその程度の女だったのか」

「あなたにはわからないでしょうよ。好きな男のちんちんに負けるなら、わたしは本望よ」完全に開き直って、陶然としているギネヴァを横目に、イリーシャは齒ぎしりをする。

「あたしだって、エリックが好きだ。昔から可愛くていろいろ面倒をみてやったんだ。おまえなどとは積み上げてきた歴史が違うのだ……くう、エリック、そんな性悪女に入れるくらいなら、あたしに入れる」

「あれ、いいんですか？ それじゃ、ぼくの奥さんになってくれますね」

エリックの念押しに、イリーシャは悔しげに呻く。

「ぐっ、その女と同列というのは、気に入らんが……元々おまえはあたしのもものだからな」  
「わたしだって嫌よ。エリック、そんな女は忘れて、わたしと楽しく暮らしましょう」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫は、全編の方向性をきまめる

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!